



高峰秀子

VS

瀬木慎一

あの道・この道

美術公論社

高峰秀子

あの道
この道

瀬木慎一

美術公論社

あの道・この道

昭和60年7月25日初版発行

昭和60年8月30日第2刷

著者 高峰秀子
瀬木慎一

発行者 石坂敏夫

発行所 美術公論社

〒141 東京都品川区東五反田 2-2-16

TEL 03(449)1841(代) 振替・東京1-18318

印刷 函書印刷株式会社
製本

定価 1,200円

ISBN 4-89330-056-3 落丁・乱丁本はお取り替えます

©1985 Printed in Japan

目次

巨匠たちへのオマージュ

梅原画伯の近況

チャーチル・クラブ

心に残る画家たち

藤田画伯のパリ生活

パリ一九五〇年、五九年

写楽と北斎

ルオーが好き

ピカソの魅力

ムッシュウ・フジタ

天然記念物、梅原先生

どこにでも描く

藤田嗣治の電話帳

梅原龍三郎の粘土細工

97 93 86 78 72 61 57 43 35 27 17 14 9

フツーのおじさんとして
創造者の背後には……

*「秀子像」お別れパーティ 高峰秀子

121 111 104

映画のよき時代

井上靖先生とアフガニスタンへ

百閒先生が面白い

在りし日の有吉佐和子さん

戦時中の慰問

宮城道雄先生

太宰さん

「浮雲」のころ

道具屋めぐり

骨董屋開店

楽しかった三年間

182 174 170 157 155 153 141 137 131 129

そして、今

半年はハワイ

「人情話 松太郎」と江戸弁

艶福家、松太郎先生

人生は明るく

喜劇役者

現代の美人

巨匠時代の終焉

美術館の現況

現代画家気質

肩書は、もと女優

切れ味のいい亀倉さん

均一化した好み

*対談を終えて 瀬木慎一

あの道・この道

巨匠たちへのオマージュ

—— 梅原龍三郎・藤田嗣治・ピカソ ——



梅原龍三郎 「高峰秀子像」 1950年

梅原画伯の近況

高峰 求龍堂から、梅原龍三郎先生の随筆座談会集「天衣無縫」(昭和五十九年十月刊行)というのが出ますね。私の出席している座談会とか対談、三、四回分も載るみたいです。

瀬木 梅原先生のまとまった文集というものはないから、きっと面白いと思いますよ。そう長いものはないかもしれませんが、まとまると非常にいい。

高峰 今は、ほとんどしゃべれませんものね、梅原先生は。

瀬木 この間お会いになったのでしよう。

高峰 ええ。

瀬木 何か全然物が食べられないとか。

高峰 無理に口に押し込んできますけれども。

瀬木 それは高峰さんでないと……。 (笑)

高峰 世の中には義理ってものがあるだろうとか何とか言いながら、口あいてというのと嫌々お

あけになって。でも、すごいですよ、まだ、ウナギですよ。ウナギをペロリ。

瀬木 ほう。

高峰 ウナギ、フォアグラ、オムレツ、フカのヒレ。

瀬木 ほう、相変らず美食が続いていますね。

高峰 だけど、寝たり起きたりで、食欲もムラになりましたね。

瀬木 でも、軽井沢から戻ってこられたんですから。

高峰 今度オープンする有楽町西武の梅原展のテーブルカットに行きたいような感じですけど、車椅子でどうでしょうかね。

瀬木 何年というもの、先生を見かけたことがありますね。

高峰 川口先生のところから「浅間」も出ていますし、とても大きな立派な展示会のようですね。先生も御覧になりたいのでしようけれど……。でも、偉いですね、九十七歳ですよ。

瀬木 そうですね、シャガールと同じですよ。ああいう年齢になられて、何を考えておられるのかと思いますね、おわかりですか。

高峰 何、考えているんでしょう、時々ちょっと……。この間もね、「昨日は、家へ入り切れぬような翼の大きい鳥が飛んできて、家に入ってくるかと思っただけでも、余り大きくて入っ

てこなかった」、なんておっしゃるし。

「軽井沢にいらしてて、亡くなった奥さんのことをフツと思ひ出されたらしくて、あのおばあは今ごろ東京で何食べてるかなとか、おばあは一人で寂しくないだろうかな、なんておっしゃるのですって。じゃ東京に帰ってらしてからママ（艶子夫人）のことおっしゃるかな、というと言わない。だから、ときどきふわふわとなる。大体はしっかりしているんです。

この頃は、おしめなんか用いるらしいのね、それで御飯食べた後でプツとおならをなさったの。そしたら、秀子さんがいるから窓や戸をみんな開けなさいって。ちゃんとそういうことわかってるの。だからね、先生、毛布もふとも掛かっているからちっとも臭くないからいいよって言ったら、そうかなあなんて、非常におしゃれの方ですからね、そのところはしっかりしている。それだけにお気の毒で……。

瀬木 じゃ、かなりまだ意識はしっかりしていらっしやるのですね。

高峰 しています。

瀬木 高峰さんは大病なさったことありますか。

高峰 ないんですよ、私。ですから病人の気持わからないんですよ。

瀬木 私、二十代に結核でね、戦後ですからみんなかかったのですけれども、三年ほど寝てた

ことあるのです。二十代でも、人間は行動が停止しますと過去のことを思い出すばかり。特に重病で明日は知れないなんていう状態になりますと、嫌なもんですねえ、人間というものは。どうしてこんなことが思い出されるのかというような、細かい嫌なことがいっぱい自分の中から吹き出してくるの。苦しいもんですね。

高峰 大病すると、人生観が変わって言いますけど。

瀬木 どうしても反省的になりますね、嫌なことがいっぱい出てくるの。太宰治が、人間は人に言えないことが三つぐらいあると言うんだけど、三つどころじゃありませんよ、百も二百も出てくるの。(笑) 恥ずかしいことばかり。ですから、梅原先生みたいに長命な方はどういふふうなのかと思いますね。

高峰 夢の中では非常に自由らしくて、ピカソと描き比べをしたとか……。あの先生、とにかく桁外れなんですよ、夢も。いつかも、昨日は八路军に追っかけられてって。どこでって言うたら、写生しようと思って絵具箱を持っていたら八路军が追っかけてきたって、それで前に行く軍隊のトラックに飛び乗ったとかね。何のことって聞くと、夢。

瀬木 でも、実際に似たような経験がおありだったのかな。北京か何かに行っておられる時期にね。

高峰 パリのオペラ座でオペラを見ていたら、ナポレオン役の人が都合悪くなったから出ると言われたって。それで台詞せりふがあったら出来ないし、そんな急に言われても出来ないと言ったら、死んだふりしているだけだと言われて、そんなこと言われて困ったとか、それも夢。

瀬木 それは全く夢なのかしら。藤田嗣治なんかは、パリでなにかしたことがあったようですが。ナポレオンの役というのは面白いですね。

高峰 六、七年前に目を手術なさったですよ。そのとき、慶応病院で私、付いていたんですよ。今は簡単ですけど、そのころは片目だけで、一時間以上かかりましたね。帰ってらしたら目に包帯して、そして手をママと私が片一方ずつ握っていたら、突然「マリー・アントワネットがね」と言うのですよ。私は全然学がないから、いきなりマリー・アントワネットのことしやべれって言われたのかと思って驚いてしまったの。マリー・アントワネットがどうしたって言うと、僕がさっき手術室に行くときに、マリー・アントワネットが処刑される前に馬車に乗せられて町中引き回された、その気持はこんな気持だったのかなと思っちゃって。

瀬木 これはちゃんとしたことですね。

高峰 だけど、ちょっと桁が外れているんですよ。(笑) そういう会話が。

でも、先生がとつびなことをおっしゃらなくなったときは、おしまいだと思ってますけど。

瀬木 お話はかなりできるのですか。

高峰 ええ。だから本当の意味の老衰じゃないですか。御飯食べると眠くなるし、起きていますよりは寝ていた方が楽っていう感じですよ。

瀬木 梅原先生については、高峰さん、たくさんお話がおありでしょう。一番身近におられるから。

高峰 普通のおじさんとしてはね、よく知っております。

チャーチル・クラブ

瀬木 一番最初は、どういうふうにしてお会いになったのですか。

高峰 一番最初は、戦後、素人画家のチャーチルさんね、コレクターとしても有名でしょう、あの人のあやかろうというのでチャーチル・クラブというものをつくったんです。戦後で何の楽しみもないものですから、そのときはものすごい顔ぶれで、生徒の方が少なくて先生の方が多いんですね。先生が猪熊弦一郎さん、佐藤敬さん、石川滋彦さん、宮田重雄さん、益田義信さん。それで顧問が梅原先生だったの。